

攀安知とその家臣団の氏素性を探る

上間 篤

要旨

かつて伊波普猷は、今帰仁という地名を手掛かりにして、中世にこの地域を勢力基盤とした武装集団の出自に関して独自の渡来人説を公表した。奇しくも近年の発掘調査から得られた出土史料は、押し並べて伊波のこの見解を支持する内容を具備したものとなっている。ところで伊波が唱えた渡来人説については、従来ややともすれば研究者の間でなおざりにされて来た感は否めない。それ故に、統一王朝以前の今帰仁勢力の氏素性を問う研究は遅々として進展せず、今日の状態を招いている。それはさておき、発掘された中世今帰仁勢力ゆかりの関係史料は、あまねく元朝に仕えて江南地方で活躍した西域出自の色目系騎馬軍団との関係を傍証する内容を孕んだものとなっている。本稿では、伊波の見解を再考し評価する観点から、指摘した関係史料及びそれと不可分の関係にあると判断される元朝配下のアラン騎馬兵団について考証し、従来謎とされてきた攀安知とその家臣団の民族的出自の解明を目論む。

An Inquiry into the Ethnic Origin of Han Anchi and His Close Subjects

Atsushi Uema

ABSTRACT

Fuyu Iha, the founder of Okinawan studies, once made an intriguing proposal as to the origin of the military force which occupied Nakijin Castle in medieval times. He argued that the Nakijin forces consisted of a group of men originating either in the Korean Peninsula or in the mainland of China. Interestingly, the excavated items, which we can study today thanks to the series of excavations conducted so far in and around the castle, indeed suggest that the view once advocated by Iha is partially correct. However, the ethnic background of the medieval force of Nakijin reflected in this archeological record is of neither Korean nor Chinese origin, contrary to what Iha once inferred. Instead there is an apparent connection with an equestrian people of Iranian stock named Alan or As coming from the central part of Eurasia. By examining the excavated items in relation to knowledge of religious beliefs, burial customs, artistic ornamentation, popular pastimes, and military equipment, including the sword once owned by Han Anchi, king of Nakijin, this paper proposes that Han Anchi and his close subjects were descendants of the Alan cavalry unit that played a distinguished military role in southern China throughout the Yuan Era.

はじめに

沖縄学の礎を築いた伊波普猷は、『琉球国旧記』を論考するにあたり、今帰仁という地名に言及して、〔古代国語で、支那若しくは朝鮮からの新来者をイマキと云ったのが、後に居住地の呼称ともなって、今木或いは今城が宛てられたように、同半島でも新来者が、やがてその居住地の名ともなり、この地方が北部の政治的中心となるに及んで、その下に、統治を意味する「知り」が附いて、「いまきじり」になったと、みて差し支えなからう〕¹、と結んでいる。今帰仁という地名に関するこの説は、伊波自身の言語学に基づく教養から紡ぎ出された見識であることはいうまでもない。けれども伊波が提唱したこの説の正否を詳細に考証した論文は、いまだ皆無に等しい。中世今帰仁勢力の氏素性に関する研究がかかる進捗状況にある中で、近年今帰仁城跡及びその周辺から得られた発掘史料は、伊波がかつて唱えた渡来人説を傍証する内容を孕んだものとなっている。中でも、青花碗に描かれたキルギス族の騎馬武者像²、ギリシャ十字を髣髴とさせる縦横同寸法の十字紋、扁平鎌、短冊状やすり、サイコロと小円形の石駒などといったものは、その最たるものとして注目される。本稿においては、往時の食生活、宗教、呪術、葬送、軍装備、娯楽などと関係する出土史料及び千代金丸に施された紋様、さらには元朝に仕えて江南地方に駐屯したアラン近衛兵団などに関する考察をとおして、中世今帰仁勢力の氏素性に迫ってみる。

I. 出土史料に看取される西域的風貌

1) 麦の炭化粒と回転式石臼をめぐって

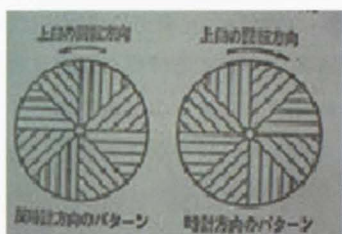
考古学史料としての食料の残滓は、関係する時代の食生活の実態を反映する重要な物証である。中世今帰仁勢力（14世紀前半後期～15世紀初頭を想定）との関わりが指摘される食糧残滓には、米や麦といった穀物の炭化粒などが存在する。中でも炭化した麦粒の出土事例は、回転式の石臼が今帰仁城跡の郭内で発掘されたことともあいまって、すこぶる注目される。増田精一は粉食の始まりと不可分の関係にある石臼について、「中国の石臼は戦国、漢代にはじまる粉食の起源と共に西方から伝わったに相違なく、パルティアの石臼がギリシャ、ローマの影響下にあるごとく、中国の石臼もその東伝の一つであろう」³、と述べている。また隋・唐代の東西交易で名を馳せたソグド商人に関する研究で知られる森安孝夫の記述によれば、古来粒食が主体であった東アジアの食文化に粉食の食事法が現れるのは紀元3世紀頃であるとされ、加えて漢語の麵なる文字についても、その本来の語義は麦粉を意味するものであったとされる⁴。古来粒食を旨とした日本の食文化に粉食が導入されるに至った経緯には回転式石臼の存在が不可分に絡んでいると見なされるが、三輪茂雄はそのあたりの事情に関して、「従来の定説では江戸中期となっているが、遺跡の発掘結果ではそれよりずっとさかのぼって、信長の時代にもかなり使われていた形跡がある」⁵、と述べている。石臼の使用例に言及した三輪のこの指摘は、中世に沖縄本島の北部一帯を勢力版図とした今帰仁勢力の食の実態に関する文化史的意義を考えるにあたって参考になる。先に今帰仁城跡の近郊及びその郭内から麦と回転式の石臼が出土している事実を述べておいた。これらの出土事例は、14世紀前半後期から15世紀初頭に向け



(中世今帰仁の麦の炭化粒)⁶



(中世今帰仁の石臼)⁶



(石臼の溝彫りのパターン)⁹

てこの城を根城とした勢力の間で粉食が行われていたことを証左するものである。ひるがえって、紀元前期の西アジアに出現した回転式石臼は麦文化圏が生み出した最大傑作の一つと見なされているものである。麦文化圏における石臼の起源について研究した増田精一によれば、麦文化発祥の地として知られる西アジアに回転式の石臼が出現するのは紀元前期の二千年頃とされ、後にそれがギリシャ・ローマ世界に普及するに及んで今日に伝わる左回転式の石臼が誕生したとされる⁷。面白いことに今帰仁城跡から出土した回転式の石臼は、それに彫り込まれた溝の形状から判断して、ギリシャ・ローマ型の系譜に属するものであることは明らかである。そのことの検証にあたっては、三輪茂雄の研究が大いに役立つ。本項の下段で紹介する石臼の解説図は氏の論文から借用した。図の左手に線引きで示された溝彫りの様式は、反時計回りのパターンを示す。この様式に今帰仁の石臼のそれを重ね合わせてみれば、両者が様式において出自を同じくすることは一目瞭然である。一方において今帰仁の石臼は、それが小型で軽量であることを鑑みれば、定着型の農耕文化とは一線を画す文化的色合いを帯びたものであることを強く印象づける。この石臼は、それが小型でしかも容易に携行することが可能な重さに仕上げられていることにおいて、生活用具のみならず武具にいたるまで徹底して軽量化を図ったことで知られるユーラシ

ア大陸の遊牧社会の生活様式と不可分に関係しあっている特徴を滲ませる。ところで、先に三輪の指摘を引いて紹介したように、わが国における石臼の歴史は以外にも浅く、古くてもそれは、今のところ16世紀の後半期から先へ遡ることのできるものではないらしい。ならば問題の今帰仁の石臼は、現時点における日本最古の左回転式の石臼として認定されてしかるべき資格を有していると判断される。型式、重量及び機能といった観点から、13世紀から14世紀頃のコーカサス及び中央アジア一帯の遊牧社会の生活様式との関連が指摘される淡い赤銅色を帯びた今帰仁の石臼は、いみじくも中世に沖縄本島の北部一帯を勢力版図とした今帰仁勢力の民族的出自を示唆する要素を孕んでいると判断される。因みに、他に類例を見ない産地不明の砂岩質の石材を素材とするこの石臼は、いずれわが国の粉体工学の関係者の注目を浴びることにもなる。

2) 宗教、呪術、ならびに葬送

中世今帰仁勢力の宗教、呪術及び葬送儀礼と関係する出土物には、種々の十字紋をあしらった元代の磁器類（青磁碗、青花皿、碗底にスタンプ状の卍紋を施した白磁碗を含む）及び城郭内の一角から出土した四足動物の骨といったものなどがある。出土史料に看取されるこれらの存在は、中世今帰仁勢力の宗教的背景や文化的性格と不可分に絡んでいるものとして注目される。中でも十字紋は、青磁碗にあしらわれたものを筆頭に、青花皿に描かれたものや千代金丸

(十字紋をあしらった青磁碗)¹¹

じ長さに揃える慣行はギリシャ正教会において尊ばれてきた伝統である。いみじくもこの伝統は、問題の十字紋の中心軸に然る草花を模して形づくったもう一つの十字意匠にも看取される。

(青花皿に描かれた十字紋)¹²

紹介した草花十字紋が四葉のクローバーを表象するものであることに関しては、筆者が先に発表した論文「青花皿にあしらわれた十字紋の氏素性を探る」¹³の中で論じておいた。因みに、日本ではくうまごやしとも呼ばれるクローバーは、紀元前期のユーラシア大陸に発生を見た遊牧社会の発展を支えた重要な牧草であったことで知られる。さらに植物学が伝えるところによれば、元来クローバーは、バルカン半島及びその東隣りの小アジアを原産地とする植物でもある。ところで馬の飼育には不可欠とされたクローバーが、古代には名馬の産地として知られたフェルガーナ（現ウズベキスタン東部地方）から東アジアの漢地に人為的に移植されることになるのは、西域の名馬の獲得に執念を燃やした漢王朝（後漢）の時代に遡る出来事である¹⁴。周知のとおり、クローバーの葉姿は三つ葉で構成されているのが常である。ところが、時折その中から突然変異によって四つ葉を持つものが現れる。この四つ葉のクローバーは、幸運にあずかろうとする人間の心理と結びつき、この植物の原産地として知られるバルカン半島及び小アジア地域の古代社会において靈力に秀でた畏敬の対象物として崇められるようになる。この種の土俗の信仰が、後続のキリスト教社会に認められる十字架に靈力を求める信心と遠因の関係にあることは想像するに難くない。ところで、馬の飼育に不可欠とされたクローバーがわが国の歴史と直に関わるようになるのは、ヨーロッパの文化を導入して近代国家への変貌を目指した明治初期の出来事に他ならない。すでに指摘したように、四葉のクローバーと中世今帰仁との関わりは14世紀に遡る出来事であるが、面白いことに往時の今帰仁勢力と四葉のクローバーの関係をめぐる問題は、既述の内容だけにとどまるものではない。左の写真史料は、千代金丸の鐙を紹介したものである。

(千代金丸の鐙)¹⁵

の鐙、さらには自害して果てる寸前の攀安知の立ち居振る舞いの有様について記した『中山世譜』¹⁰にもその存在が指摘されることから、その紋様が中世の今帰仁勢力にとって格別の意味を持つものであったことは明白である。出土物にあしらわれた種々の十字図柄の中で、とりわけ元様式の青花皿の内底にあしらわれた縦横同長の十字紋は、中世今帰仁勢力の宗教的背景を如実に語るものとして注目される。そもそも十字架の形成にあたり、その縦軸と横軸を同

じ長さ

に揃える慣行はギリシャ正教会において尊ばれてきた伝統である。いみじくもこの伝統は、問題の十字紋の中心軸に然る草花を模して形づくったもう一つの十字意匠にも看取される。

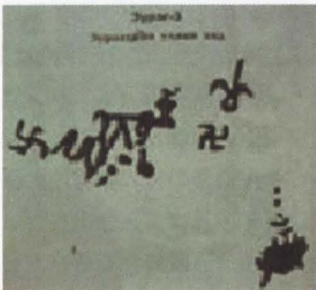
紹介した草花十字紋が四葉のクローバーを表象するものであることに関しては、筆者が先に発表した論文「青花皿にあしらわれた十字紋の氏素性を探る」¹³の中で論じておいた。因みに、日本ではくうまごやしとも呼ばれるクローバーは、紀元前期のユーラシア大陸に発生を見た遊牧社会の発展を支えた重要な牧草であったことで知られる。

さらに植物学が伝えるところによれば、元来クローバーは、バルカン半島及びその東隣りの小アジアを原産地とする植物でもある。ところで馬の飼育には不可欠とされたクローバーが、古代には名馬の産地として知られたフェルガーナ（現ウズベキスタン東部地方）から東アジアの漢地に人為的に移植されることになるのは、西域の名馬の獲得に執念を燃やした漢王朝（後漢）の時代に遡る出来事である¹⁴。周知のとおり、クローバーの葉姿は三つ葉で構成されているのが常である。ところが、時折その中から突然変異によって四つ葉を持つものが現れる。この四つ葉のクローバーは、幸運にあずかろうとする人間の心理と結びつき、この植物の原産地として知られるバルカン半島及び小アジア地域の古代社会において靈力に秀でた畏敬の対象物として崇められるようになる。この種の土俗の信仰が、後続のキリスト教社会に認められる十字架に靈力を求める信心と遠因の関係にあることは想像するに難くない。ところで、馬の飼育に不可欠とされたクローバーがわが国の歴史と直に関わるようになるのは、ヨーロッパの文化を導入して近代国家への変貌を目指した明治初期の出来事に他ならない。すでに指摘したように、四葉のクローバーと中世今帰仁との関わりは14世紀に遡る出来事であるが、面白いことに往時の今帰仁勢力と四葉のクローバーの関係をめぐる問題は、既述の内容だけにとどまるものではない。左の写真史料は、千代金丸の鐙を紹介したものである。

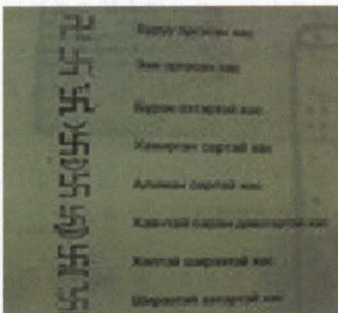
それにあしらわれた種々の紋様とその配置に着目すれば、それには、縦軸と横軸の線状に十字の形状を意識して配列がなされたことを窺わせる、四葉のクローバーを透かし彫りにした紋様が施されているのが目に留まる。因みに、それらの傍らに配されたハート形の意匠は、猪目と呼ばれる紋様である。これらの種々の紋様については、元朝配下のアラン騎馬兵团との関わりにおいて後述することにする。

さて、中世今帰仁勢力と呪術との関わりについては、城

郭内から出土した白磁碗の内底に型押し技法を用いてあしらわれたスタンプ状凸面卍紋の視点から、その実相に迫ってみることにする。卍紋といえば、『国史大辞典』の解説¹⁶でも明らかのように、わが国では、ひたすら仏教の視点からそれに言及する傾向がみられる。ところが中世今帰仁勢力にゆかりの卍紋に関しては、それを取り巻く歴史的背景を鑑みれば、上述の仏教起源説の視点からその存在意義を首尾よく説明しうるものではない。筆者は、先に「青花碗に描かれた騎馬戦士の氏素性を探る」及び「青花皿にあしらわれた十字紋の氏素性を探る」と題した二つの論文を名城大学の紀要集に発表した。これらの論文の骨子は、中世今帰仁勢力の中核を担った集団の氏素性について、今帰仁城跡出土の発掘史料の観点から、元王朝に仕えて江南地方に配置された色目系騎馬兵団との関わりを論じたものである。以下に、問題のスタンプ状卍紋を考察するにあたり、上述の論文の主旨に沿って、それに秘められた呪術性について探ってみることにする。そもそも元王朝は、遊牧社会の一員であったモンゴル人が中華文明の揺籃地に進出して打ち立てた征服王朝であった。この王朝の主であったモンゴル人は、ユーラシア大陸の他の遊牧民と同様に、マンジ紋の呪術性を重んじる人々であった。以下に紹介するいくつかのモンゴル語に固有の言葉は、そのことの証であると考えられる。モンゴル語では、マンジ紋を総称して<ハス>と呼ぶ。またこの呼称は、複義的要素も孕んでいる。周知のとおり、ハスいわゆるマンジには、右回転のかたちと左回転のそれとがある。モンゴル人の伝統的な解釈に従えば、前者は男性、後者は女性を象徴する。その場合、右回転のマンジはハス・ブー、左回転のそれは単にハスと呼ばれる。加えてハスは、モンゴル語において「対」の意味を有する言葉でもある。これらの語彙や用例は、時間軸において、モンゴル人がマンジ紋と久しく交渉を重ねてきた歴史の証であるとみなされる。



左に示したマンジ紋の図柄は、20世紀に入りモンゴルの西部地方にある洞窟内で発見された岩絵の一部であるが、これを参照すれば、向かって左手にハス・ブー、右手にハスが対となって描かれているのが見て取れる。これらのマンジ紋を紹介した文献によれば、この岩絵の年代は新石器時代に遡るものとされ、さらに同文献には、旧石器時代のものとされる表意図柄（洞窟の壁に描かれたもの）の一部をなす3体のマンジ紋なども紹介されている¹⁷。20世紀に入って発見されたこれら岩絵のマンジ紋は、その年代の古さという点において仏教起源のマンジ紋の比類ではない。マンジ紋発祥の地と見なされるモンゴル高原一帯は、トルコ系種族の故地として、また9世紀中葉以降には、約1世紀に渡って北方のエニセイ河流域を故地としたキルギス族がこの地域を支配したことで知られるが、かか



る民族の間では、眉間や腕、ならびに首筋のうなじのあたりにマンジ紋の刺青を施すことが行われた。マンジ紋に関わるこのような風習が、古来ユーラシア大陸の騎馬遊牧民に広く流布したマンジ信仰（マンジ紋には悪霊を払いのける力が宿ると信じられた）に由来するものであったことは明らかである。次に紹介する種々のマンジ紋は、17世紀後半期のモンゴル高原一帯で使用された焼印のリストである。このリストに基づけば、当時焼印にはすべからくマンジ紋が使用されて

いたことが分かる。17世紀のモンゴル高原一帯で焼印にマンジ紋が選択されたことについては、同世紀の彼の地域における気候の変化に起因するものであったと察せられる。気候変動と人間との関係を研究した鈴木秀夫によれば、17世紀は小氷河期と呼ばれた冷涼期の中にあつて、氷河期以降の地球が最寒期を迎えた時代であったという¹⁸。鈴木の研究によれば、モンゴル高原の東隣に位置する大興安嶺地区においては1650年代から1660年代にかけて気温が最も下降線を辿り、少し下って1670年代から1720年代には、その南西部に連なる天山山脈東部一帯において気温が最低値を示したことが分かる¹⁹。この地球規模の気候変動が、モンゴル高原を含めた高緯度地域に暮らす遊牧民の生活基盤を危うくする要因になったことは想像に難くない。近年、猛吹雪に見舞われたモンゴル高原で多くの家畜が失われたことは記憶に新しい。かかる脈絡でマンジ紋の焼印を捉えるならば、17世紀にモンゴル高原一帯の遊牧民がかけがえない家畜にマンジ紋を焼印した行為は、自然の猛威になす術を失った遊牧民がマンジ紋の靈力に一途の望みを託して超越者の加護を願い奉った呪術的性格を帯びたものであったと解釈される。

ところで、遊牧民が保有する家畜にマンジ紋の焼印を施した行為は、ひとりモンゴル高原の遊牧民だけに限られた風習ではなかった。4世紀の終焉期には、古来コーカサス平原で遊牧生活を生業としたイラン系種族のアラン族などが、ウラル山脈の周辺地域から移動してきたフン族の圧迫を受けて、西方への移動を余儀なくされる。その後アラン族は、ローマ帝国北辺部のゲルマン諸族と共にローマ帝国の軍隊に傭兵として迎え入れられ、ヨーロッパの地に東方出自



(中世今帰仁のスタンプ状卍紋)

の騎馬文化を紹介する役割を担うことになる。次に紹介する動物の絵は、ローマ帝国終焉期に遡る南仏のアラン族の遺跡で発見された図柄の一つである²⁰。描かれた四足獣は、かつてヨーロッパ人がアランと呼んだ新種の犬（アラン族は猪狩用に特別に訓練した犬を東方から導入したことで知られる）であったと考えられるが、この種の動物の大腿部にマンジ紋が印されていることをみれば、東方出自のアラン族にとってもマンジ紋は畏敬すべき呪術性を帯びたものであったことが分かる。さらにこの素描画が5世紀に遡る様相を呈するものであることは、ユーラシア大陸の遊牧民に継承されていた焼印の風習なるものが以外にも古く、しかも広範囲に流布していたものであったことを知らしめる。因みに家畜に焼印を施す風習は、左に掲載した写真史料からも分かるように、現在でもユーラシア大陸の遊牧民に連綿として受け継がれているものである。

さて既述において、今帰仁城跡の郭内から出土した種々の考古学史料は、元朝に仕えた色目系騎馬兵団との関係を無視しては扱えない内容を帯びていることを指摘しておいた。かかる視点に立脚するならば、今帰仁城跡ゆかりの白磁碗の内底にあしらわれている凸型スタンプ状卍紋の文化的性格及びその存在理由を明らかにするにあたっては、マ

ンジ紋を畏敬の対象として崇めてきたユーラシア大陸の騎馬遊牧文化を視野に入れた考察姿勢が求められるものと認識される。以下にかかる観点から、問題とされている今帰仁のスタンプ状マンジ紋の呪術的性格について考えてみる。ユーラシア大陸の遊牧民の間では、マンジ紋はつとに邪気払いにその霊力を発揮するものとして崇められてきた。先に紹介した焼印の風習はその一事例であるが、13世紀のモンゴル帝国時代には、皇帝専用に仕立てられた豪華なゲル（外面を覆う天幕には虎や豹などの毛皮が用いられた）の外幕の底辺部にも悪鬼払いとしてマンジ紋があしらわれた²¹。ところでマンジ紋の呪術的側面に言及するにあたっては、さしあたり先行研究の成果を踏まえることが肝心であるが、アルベルト・アルバレス・ペーニャが伝えるカフカズ山系におけるマンジ信仰の事例は、問題のスタンプ状マンジ紋の出自と文化的にも繋がる性格を帯びている。アルバレスは自著において、北オセチア・アラニア共和国の今に伝世する風習について触れ、彼の国には窯入れする前のパン生地にはスプーンやフォークなどを用いてマンジの形を印す慣わしがあることを紹介している²²。またこの種の風習に類似するもの



（8弁ロゼッタ花紋）²³

として、スペイン北部のアストゥリアス地方においては、6弁紋あるいは8弁紋の花びらをあしらった花紋を作り立てのチーズやバターの上に押し当てる風習があることなどを紹介している。アルバレスによれば、かかる行為の背景には、人間に危害を及ぼすと考えられている悪鬼から命綱の食物を守ろうとする呪術的行為が認められるのだという。因みに、紹介したスペイン北部の風習については、いにしへのロゼッタ信仰との関係も指摘されている。かかる事例を踏まえて今帰仁の卍紋の正体を考えれば、それが食物を盛る器の内底に凸状にあしらわれていることから判断して、ある種の食習慣にまつわる俗信との関わりが指摘される。先に回転式の石臼について考察した折に、今帰仁勢力と粉食との関係に言及しておいた。因みに麦粉を料理するとなれば、先んじてそれには水を加えるなどして練粉にする必要がある。この過程を経て出来上がった生地を問題の器の内底にあしらわれた凸状卍紋に押し当てれば、その表面には、おのずと凹状の卍紋が形づくられるはずである。このように推考すれば、中世の今帰仁においても、先のカフカズの事例と同様に、卍紋は邪気払いに力を発揮する護符の類として敬われていたものと推察される。

一方、今帰仁城からの出土史料である馬や牛の骨（それらには人の力が意図的に加えられた痕跡が認められる）といったものにも、祭祀との関わりを髣髴とさせる趣がある。かつてモンゴル人が支配した元朝においては、有力者の死を弔うにあたり「焼飯」と呼ばれた葬送の儀が執り行われた。白石典之はこの祭祀の風習について、「焼飯」とは北方民族に見られた祭祀習俗で、穴を掘り、その中に犠牲獣や飲食物を入れて焼くというものである²⁴、と述べている。問題の馬や牛の骨の出土史料と焼飯との関係を実証するにあたっては、今後これらの骨が埋まっていた状態やその周りの土壤に焼け焦げた痕跡が認められたか否かといった事柄を詳らかに検証する必要があることはいうまでもない。さらに馬骨との関連では、これまでに今帰仁城の郭内及びその周辺域から馬の頭蓋骨が出土した事例などは報告されていない。この事実も騎馬文化との奇しき因縁を示唆するものとして注目される。なんとすれば、つとにユーラシア

の騎馬遊牧文化圏においては、馬首は靈力を宿した神聖なるものとして扱われ、有力者の死に臨んでは、それを故人の遺骸の周りに埋めて葬送の儀礼とした。よって今後の発掘調査の進展によっては、今帰仁城跡の周辺域から丁重に葬られた馬の頭骨部が出土することなども予想される。

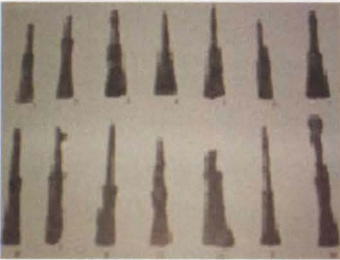
3) 中世今帰仁勢力と軍装品

中世今帰仁勢力と関わる主な軍装品には、鏃（骨製のヤジリを含む）、石製ヤスリ、種々の短刀類に加え、千代金丸と称する類まれなる刀剣といったものが存在する。それらの一つ一つには、いわゆる中世日本の軍装品とは明らかに一線を画す趣と特徴が看取される。以下に、上述の軍装品の系譜及び千代金丸の柄頭にあらわれた花紋について、東西の文化史を踏まえて考察してみる。

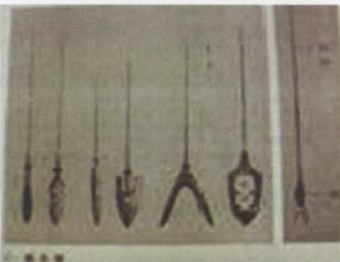
下に掲載した史料1及び史料2に登場する鏃は、いずれも今帰仁城跡で発掘された鏃の種類



(史料1、筆者撮影)



(史料2)²⁵



(史料3)²⁶

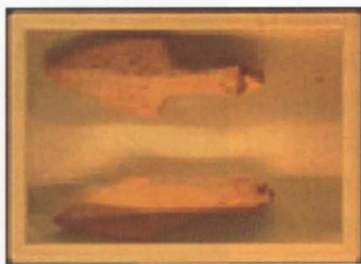
1	8.5x2x5	Цэвчүүр зэв
4	4 x2 x1.5	Ангуг зэв
15	8.5 x1 x3	Зэслын сум
16	4.5 x1 x3.5	Учинг
3	5 x1 x2.5	Цитэцхэр сум
10	5 x1 x3	Зэслын сум

(史料4、モンゴル軍団の鏃)²⁷

である。これらのヤジリの形状に着目すれば、中世今帰仁の鏃は、他に出土事例が報告されているスキタイ型の三角鏃及び骨製のヤジリを除き、そのすべてにおいて先端部が扁平の形をしたもので占められていることが分かる。扁平鏃の形状にまつわるこの事実は、中世今帰仁勢力の氏素性とも深く関わる様相を帯びており極めて注目される。下段の史料3は、中世日本の代表的な鏃を紹介したものであるが、その中に中世今帰仁の扁平鏃と同類の形状を示すものは一つとして存在しない。この事実に基づけば、中世今帰仁勢力の氏素性をめぐる問題は、日本の伝統的中世史観の枠内では扱えない性質を帯びたものであることが理解される。一方で中世今帰仁の鏃とモンゴル軍団の鏃を比較してみると、両者の形状には複数の類似点が見出せる。下段に示した史料4は、モンゴル帝国下の騎馬軍団にゆかりのヤジリの一部を紹介したリストである。その最上段に見えている鏃は、モンゴル語でツァブチュールゼブ（Цавчуур зэв）と呼ばれるものだが、この種の鏃と先の史料1に登場した今帰仁の扁平鏃が形において近似した特徴を示すのは面白い。またこの鏃の下に見えている先端部がV字型にへこんだ鏃はアンググゼブ（Ангуг зэв）と呼ばれているもので、今帰仁城跡からはこの手のものとの近似性が指摘される鏃も出土している。またリストの3番目と6番目に見えている鏃類は、いずれのものもザスリーンシム（Заслын сум）と呼ばれているもので、これらの鏃の形状には、先に言及した今帰仁の扁平鏃（史料2参照）との近似性が指摘される。紹介したこれらの騎馬文化にゆかりの鏃は、13世紀から14世紀にかけてモンゴ

ル帝国軍団の中核を担った騎馬隊に装備されていたものである。

一方において、中世の今帰仁勢力は、動物の骨でヤジリを製作していたことでも知られる。



左に掲載した骨製のヤジリはそのことを証左する貴重な出土史料である。問題のヤジリは、その精巧な出来栄えと優美な仕上がり具合から判断して実践用ではなく、往時の勢力を率いた統率者の権威や威勢を象徴する類のものではなかったかと推察される。工芸品としても高い価値を有すると判断されるこのヤジリの存在は、中世今帰仁の武装集団の中に骨の細工にひときわ長けた武具職人がいたことを傍証する。

動物の骨をもの作りの素材として扱うこととの関連においては、今帰仁城跡の郭内から出土した虎の顎骨も注目すべき出土品の一つである。それには、残存する歯と隣り合わせた箇所



に細工を施そうと試みた跡を窺わせる鋭利な切り込み痕が認められる。往時の武具職人がいかなる道具を用いて骨に細工を施していたのかは判然としないが、いずれにしてもこれらの出土史料は、中世の今帰仁勢力が骨を細工することに一際関心を寄せる武の文化を育てていたことを顕現するものである。因みに、モンゴル帝国史を著わしたドーソンによれば、ヤジリを製作するにあたりその素材を動物の骨に求める伝統は、ユーラシア大陸の騎馬文化圏で育まれた

ものであるとされる²⁹。

ところで鎌と一体をなす軍装品といえば、弓と矢とヤスリの三点に絞られるが、今帰仁城跡からは、下に掲載した短冊状の石製ヤスリが出土している²⁹。ヤスリは他に細めで角型の形をした棒状のものも出土しているが、それらに共通した特徴といえば、各々のヤスリの片端に携行用の紐を通すための穴が穿たれていることである。



(中世今帰仁のヤスリ)

この手のヤスリの特徴は、機動力を発揮するために携行品の軽量化をとことん追及したことで知られる騎馬軍団にゆかりの携行用ヤスリを象徴するものである。次に紹介する短冊状のヤスリは、中国の内モンゴル自治区で発掘された騎馬文化ゆかりの携行用ヤスリである³⁰。これを参照すれば、上述の今帰仁のヤスリが騎馬文化を出自とするヤスリの系譜に属するものであることは一目瞭然である。因みに、かつてモンゴル帝国の軍団においては、個々の騎馬兵士にこの種のヤスリを常備することが義務付けられ、かりそめにもそれを怠った者には厳罰が科された³¹。



(中国内モンゴル自治区出土の携行用ヤスリ)

他には、今帰仁城跡から出土した小刀類³²が相当量に上ることも、騎馬文化との関わりを示唆するものとして注目される。なんととなれば、ユーラシア大陸の遊牧騎馬戦士は、総じて名うての短刀使いであったことでも知ら

れているからである³³。

さて、中世今帰仁勢力の武の文化の風貌を今に伝える関連の史料は、発掘された出土物だけに限定されるものではない。中世以来沖縄の王朝史をつぶさに見てきた生き証人とでもいえる



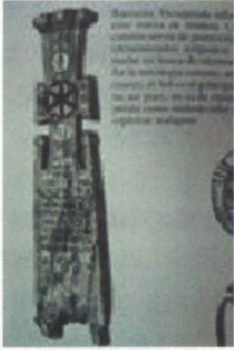
千代金丸と命名された刀が現存する。この刀の存在も中世今帰仁勢力の氏素性の解明に一役買うものと期待される。伝世によれば、千代金丸（後世の命名による）は、中世今帰仁勢力が崩壊に至る寸前までこの勢力を率いた攀安知なる頭領が所有していたことで知られるものである。左に示した写真史料は、その柄頭の写しである³⁴。楕円の形を成した千代金丸の柄頭の容姿には、観察者に日本刀と同一視されることを拒む意匠や様式上のこだわりが看取される。かてて加えて問題の柄頭には、写真

史料でも明らかなように、独特の花紋があしらわれている。以下に、この花紋がいかなる色合いを有しているものであるのかについて、元朝治下の文化状況を鑑みて考察してみることにする。一体元朝治下の漢土においては、花紋を尊ぶ風習が広く社会に浸透していたとされる。その現象については、元代に発達をみた染付けと呼ばれる陶磁器焼成上の技法との関連が指摘されている。中国語では染付けのことを青花と呼ぶのであるが、そのいわれについて先行研究は次のように説明する。

ちなみに、染付けというと、白地に青の筆で紋様や絵という「花」を描くのが、ふつうのパターンである（だから、漢語では染付けを「青花」と表現する。「花」には、もとより紋様、飾りの意味もある）³⁵。

もとより今帰仁城跡にゆかりの出土史料は、総じて元朝に仕えた色目系勢力との濃密な関係を示唆する特色に彩られている。よって千代金丸にあしらわれた花紋の意味を把握するにあたっては、かかる勢力との関係を視野に入れて考察することが肝要であると判断される。

そもそも千代金丸は異色の刀剣である。古来日本の刀鍛冶は、精魂を込めて製作した刀の茎に自らの名を刻印して作り手の名を残した。かかる伝統が存在したが故に、日本の刀鍛冶が手がけた名だたる名刀には、氏素性の問題といったものは生じ難い。一方千代金丸には、その出自を物語る刻印の類（その鞘にあしらわれた特異な紋様は例外）といったものは何一つ認められない。この事実一つをとってみても、千代金丸と日本刀との親縁関係は認めがたい。かたや美術工芸品としての千代金丸の最大の魅力は、その浅く反った細身の刀身（総長92.1cm、刃長71.3cm）にあると見られる。その容姿は、このうえなく日本人の美意識をくすぐる魅力に満ちている。それ故に、千代金丸はややともすれば日本刀に見間違えられる要素を多分に孕んでいる。一方で、その刀身の切先部を見れば、そこには日本刀に特有の鋒及び横手と呼ばれるづくりが欠落しているのは明白である。さらに千代金丸の柄の寸法にいたっては、成人男性の片手のひらを押し広げた程度の長さしかない。千代金丸の容姿をめぐるかかる特徴は、この刀が日本刀とは無縁の存在であることを雄弁に物語る。よって千代金丸の柄頭にあしらわれた花紋の意味を探るにあたっては、広く世界にその解釈の糸口を求めることが肝要であると認識される。かかる認識に立脚して西方世界にその手掛かりを求めれば、古来彼の地では、刀と花紋との間に靈妙な関係が成り立っていることが分かる。つとに西方世界の武具にあしらわれた花紋については、古のロゼッタ信仰（花紋で表象され、太陽神の象徴とされる）に由来するもの



であるといわれている。西方世界では、今日でもロゼッタを敬う民間信仰の類は継承されており、左に紹介する十字架と刀の形状を併せ持った木彫りの物体もそれを証左するものの一つである。この木彫物はかつてルーマニア各地の街道沿いに見られたもので、人々はそれを街道の路傍に突き立てて、悪しき吸血鬼（太陽、十字架、にんにくを嫌うと信じられた神話上の妖怪）から身を守る方策としたのだという³⁶。この十字刀形状の木彫塚の鏢の部分に着目すれば、そこには悪鬼払いに力を発揮するとして崇められた6弁紋のロゼッタが彫り込まれているのが目に留まる。

一方で、スペイン北部のピレネー山脈南麓やその西方のアストゥリアス地方に伝わる風習を参照すれば、彼の地域においても古くからロゼッタが厄払いに力を発揮するものとして敬われて来ていることが分かる。左に示した動物の絵は、放牧に際して羊の群れの先導役を担う雄羊を描いたものである。この雄羊の首輪とそれに吊り下げられた鐘鳴具には、厄除けとしてのロゼッタがあしらわれているのが見て取れる³⁷。紹介したルーマニアとスペインの民間信仰の類は、千代金丸の花紋に込められた意味を探るにあたり、すこぶる示唆に富むものであると



判断されるが、論理の飛躍を避けるために、いま少し千代金丸の容姿に看取される西域的風貌について述べておくことにする。千代金丸の柄の特徴については先に指摘したとおりであるが、さらにはその茎のつくりにも日本刀とは明らかに一線を画す形態上の違いが見て取れる。千代金丸の茎の場合、大きく穿たれた二つの目貫がその先端部に施されている。かかる特徴を備えた茎のつくりは、一般に西方世界の刀に見られるものである。なかんずく千代金丸の刀身を取りめる鞘（内部は鋼鉄、表層部は純金からなる）にいたっては、日本刀の鞘のつくりを参照して説明しうる類のものではない。そもそも元朝治下の中華本土において、高度な冶金術を有し、細い刀身の刀を製作していたことで知られる民族集団といえは、阿速の名で知られたカフカズ出自のアラン族がその筆頭に上げられるが、千代金丸が刀剣を軍神として崇めたこの集団と関わる様相を帯びていることに関する論考は、後段に譲ることとする。加えて千代金丸の花紋を考察するにあたっては、胴部の表面に豹皮の紋様をあしらった磁器碗（今帰仁城跡出土）といったものも、関連の史料として扱われてしかるべきであると判断される。下に紹介する写真史料は、問題の豹紋碗の写しである。一体豹紋を装飾意匠の一つとして土器などにあしらう風習は、

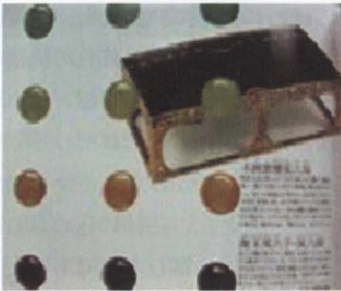


古代のイラン文化圏で発生を見るものであり、その歴史は紀元前の4千年紀に遡る³⁸。さらにこの器には、なにやら意味ありげな十字紋も染め付けられている。かかるイラン的雰囲気彩られた器の存在は、中世今帰仁勢力の中核を担った武人集団の氏素性ならびにその文化的性格とも不可分に絡んでいる様相を呈する。このように中世今帰仁勢力ゆかりの文物は、その軍装品から種々の紋様に至るまで、あまねくイラン文化ならびに西域の騎馬文化との濃密な関係に彩られている。以上の考察結果に基づいて判断するならば、千代金丸の柄頭にあ

しらわれた八弁花紋の正体は単なる美意識の発露としての装飾の類に留まるものではなく、それは、先に参照したロゼッタと同様に、厄除けとしての呪術的性格を帯びたものに相違ないと思料される。

4) 中世今帰仁勢力と娯楽

娯楽との関連では、今帰仁城跡の郭内から出土した賽（サイコロ）と小円形の石駒の存在が注目される。この両者の存在は、中世今帰仁の武人たちが、国取り合戦を想定した陣取り遊びに熱中していたことを傍証するものである。洋の東西を問わず、中世の武人たちに人気を博したこの陣取り遊びは、一般にナルド³⁹（この名称はアラビア語起源、他方ペルシャ語ではタクト・ナードと呼ばれる）の呼称で知られているものであるが、その考案年代は、ペルシャのササーン朝期に遡る。先行研究においては、ササーン朝のホスロー一世（在位531～579年）に



（正倉院の収蔵品）⁴²

侍医として仕えたブズルグミフルをその考案者と見なす説が有力である⁴⁰。従来の言説に従えば、ナルドはインドから将来したチャトルアンガ（ヨーロッパに流布してチェスと命名される）に対抗して考案されたものであるらしい⁴¹。左に掲載した二葉の写真史料は、聖武天皇ゆかりのナルド用具の一式である。ナルドは、色分けした円形の駒を盤上に並べ、賽を振って駒を進め、相手の陣内に攻め入るゲームの一種であるが、この盤上の遊びがササーン朝の文物の東漸・西漸の波に乗って東西世界へと伝播する。ナルドは

つとに東漸を果たし、奈良時代にはそれが唐王朝を經由して我が国にも将来する。かつて奈良朝政府は、国策の一環として有能な人材を文化先進地の中華大陸に派遣して彼の地の文物を学

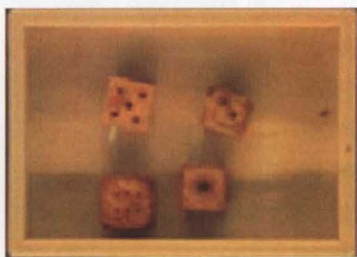


ばせ、それらを我が国に持ち帰らせた。遣唐使と呼ばれたこれらの官生らが目指した留学先は、唐の都の長安であった。往時の長安は、おりしもイラン文化で華やぐ国際都市であった。唐代の中国における西域嗜好、いわゆる胡色好み（唐代の胡人はイラン系人を指す）には尋常ならざるものがあつた。その傾向はとりわけ上流階級の人々に顕著に見られ、彼らの風流な生活には、胡食、胡服、胡楽、胡舞、胡の娯楽といったものがつきものであつたといわれる。当

時は、女性たちの化粧の仕方においても胡風が尊ばれたとされる。また名門出の女性たちにいたっては、常々男装を好み、乗馬をよくしてポーロや鷹狩りに興じ、はたまた駿馬を操って弓矢で狩を嗜む有様であつたといわれる。石田幹之助は、唐代のかかる文化の有様を評して「元来漢民族、すなわち支那人は文を尊び武を尚び武を卑しむ傾きの強い民族でありましたが、それが唐に至って嘗て見ない風潮を見るにいたりました」⁴³と述べている。因みに隋・唐期には、ソグド商人がシルクロードの沿線上で遠隔地交易の主たる担い手として大いに手腕を振るつた⁴⁴。彼らが種族的にはイラン系の人々であつたことを鑑みれば、ナルドは彼らの商業活動に伴って漸次東方へ流布していったものと考えられる。尚、前出の聖武天皇ゆかりの宝物は、往時のソグド商人が得意とした奢侈品交易の実態を知らしめる遺品でもある。

さて、中国に伝来して双六と命名されたナルドは、平安末期及び鎌倉期の日本でも人気を博した。平清盛と縁薄からぬ関係にあった後白河法皇もナルドの愛好家であったことで知られる。ところで、平安末・鎌倉期の日本と中華大陸との通行状況を紐解けば、当時の公家や武家に愛好されたナルドの出自と関係すると見られる注目すべき事柄に出くわす。以下に二人の仏教僧の事蹟を引き、彼の時代のナルドの舶来ルートについて考えてみる。平家一門がこの世の春を謳歌した頃、東アジアの情勢にひとときわ明るい人物が、我が国の歴史に登場する。戒名して妙典を名乗ったこの僧（俗名：許斐忠太）は、平重盛に仕える家臣であった。彼は、宋へ七回、またその間にはインドへも二度に渡って渡航したとされる経歴の持ち主であった。彼は、表向きは袈裟を纏う僧侶であったが、その眼差しは常に海外を見据え、とりわけ海外との交易には並々ならぬ意欲を燃やしていたと伝えられる⁴⁵。妙典が経歴した頃の中国の江南地方からインドへ向かうとなれば、蒲一族に代表されるベルシャ湾岸出自のイスラム商人らの力添えは不可欠であった⁴⁶。従って妙典にとっても、インドへの渡航に際しては、これらベルシャ系イスラム商人の手助けが必要であったことは否めない。旅の船中であって妙典は、イスラム教徒の船員や商人らと親交を深める傍ら、熟達した航海士からイスラムの航海術を始め、ベルシャ起源のナルドの打ち方といったものも同時に指南されたものと思料される。彼が帰国後に著した『海雲記』と題した航海術の指南書は、彼のかかる経験と知識を裏打ちするものであると解される。

鎌倉時代に至っては、とりわけ禅宗門徒の間で南宋への留学熱が高まり、この宗派の僧侶たちが、猫も杓子もといった具合に大陸へ渡ったことが知られている⁴⁷。この現象を反映する事例の一つに「南蕃文書」（アラビア文字で記したベルシャ文書）なるものが存在する。由来によれば、この文書は、慶政（京都は山城国松尾の法華山寺にゆかりの僧）なる僧侶が1217年頃に江南地方を巡歴した折に、偶然にめぐり合わせた学識豊かなベルシャ人から、友情の証として贈られたものであるらしい⁴⁸。この事例は、前出の妙典と同様に、鎌倉期に中国の江南地方に学んだ僧侶の中にもベルシャ系イスラム商人らと交わりを持つに至った日本人がいたことを知らしめる。妙典や慶政らの足跡に看取される江南地方との濃密な関係は、平安末・鎌倉期



（今帰仁城跡から出土した賽）⁴⁹



（今帰仁城跡から出土した石駒）⁵⁰

の日本で人気を博したナルドの出自とも絡んでいるものとして注目される。かかる脈絡に沿って中世の日本に流布したナルドの系譜を考えるならば、それは、宋・元期の江南地方から前出の仏教僧らによって我が国に持ち込まれた、イスラム商人ゆかりのベルシャ湾岸を出自としたナルドであったと思料される。

さてこの段の冒頭において、中世今帰仁勢力にとってもナルドは身近な娯楽の一つであったことを述べておいた。左に紹介する賽と石駒は、そのことの証左となる貴重な出土史料である。両者の中でも石駒の容姿に看取される粗雑で粗野な雰囲気には、辺境の地に終の住処を構えざるを得なかった武人集団のつましい生活ぶりを想起させるものがある。ところで中世今帰仁の武人たちにナルドが愛好されていたことを知らしめるこれらの物証は、これまでに考察

した今帰仁城跡ゆかりの関連史料、すなわち食料残渣としての麦の炭化粒、左回転式携行用石臼、種々の十字紋をあしらった元様式の青磁碗ならびに青花皿、スタンプ状卍紋を施した白磁碗、胴体部にキルギス族の騎馬武者像をあしらった青花碗、同じく胴体部に豹紋を染め付けた磁器碗、数種の扁平鏃、骨製ヤジリ、短冊状やすり、短刀類、といったものと不可分の関係にある史料である。これらの出土史料は、先に言及した千代金丸の花紋ならびに十字紋意匠とも表裏一体の関係を有するものであるが、中でも、千代金丸の鏢に十字架を意識して配列した形跡を窺わせる透かし彫りにされた四体の十字紋の存在は、蔡温が攀安知の最後の行状⁵¹について伝える文言とも関係する内容を帯びていて注意を喚起する。千代金丸にあしらわれた十字紋及び蔡温が伝える上述の攀安知像といったものは、生前の攀安知がキリスト教とながしかの接点を有していたことを示唆するものとして注目される。かかる認識に立脚すれば、この勢力に人気を博したナルドは、元朝末期に方国珍や張士誠らが率いた反元勢力によって江南地方から排除された色目系集団と関わる娯楽の一つであったと判断される。

ところでナルドの西方世界への伝播の動きは緩やかで、ヨーロッパ人がこの遊びの存在を知ることになるのは、バグダッド出身の著名な楽人シルヤブが、インド起源のチェスをアル・アンダルス（イスラム勢力傘下の中世南スペインの呼称）に普及させた頃と相前後する9世紀初頭以降の出来事である⁵²。その後ナルドは、中世のイスラム・スペインを経由してヨーロッパ各地にも流布することになる。西欧の今に伝わるバックガモンと称する陣取り遊びは、ナルドの変身であるとみなされている。かたやロシアにおいては、この陣取り遊びが、アラビア語を起源とするナルドの名称で普及を見ているのは面白い。ロシアにおけるこの事例は、ナルドが中東の中世イスラム王朝を経由して彼の地に伝えられた経緯を物語る。

II. 阿速族と中世今帰仁勢力

中世今帰仁勢力ゆかりの出土史料の中には、先にも指摘したように、縦横同寸法の十字紋をあしらった元様式の青花皿といったものなどが存在する。それに施された十字意匠に看取される



(飛走馬をあしらった白磁碗)⁵⁴

るギリシャ趣味及び騎馬文化の要素に関しては、筆者が先に発表した論文⁵³において詳細に論じておいた。面白いことに、中世今帰仁勢力にゆかりの出土史料には、上に言及した論文に登場する阿速族（元朝と命運を共にしたカフカズ出自のイラン系騎馬民族）との関係を暗示する他の図柄も存在する。左の写真史料に見えている飛走馬を描いたもの

がそれである。この図柄には、疾走する馬の背に翼を想起させる二股状の突起物が描かれている。奇しくもこの特異な装飾図柄は、そのモチーフにおいて、アラン族に特有の装飾意匠として知られる有翼獣の系譜に連なる特徴を具備している。以下にアラン族の歴史を紐解き、両者の関係について考えてみる。

1) アランと阿速は同族異称

アランとは、元来、先達のスキタイ族やサルマタイ族といったイラン系の騎馬遊牧民の文化

を継承した民族集団を呼ぶ名称である。また言語学によれば、このアランなる呼称は、本来アリア人を意味するものであるといわれる。往古のアラン族は、カフカズ山系の北麓から北方へ連なるコーカサスの大平原地帯（彼らは、この地を自らの民族名に因んでアイリヤーナと呼び習わしていたと伝えられる）⁵⁵を自らの勢力版図としたイラン系の種族集団であったことで知られる。その頃の彼らは、天蓋を施した牛車に家財道具の一切を積み込み、それに寝泊りしながら、牛や羊の群れを追って生計を営む、典型的な遊牧の民であった。彼らは乳製品や家畜の肉を常食としたが、必要に応じて猟犬を解き放って猪狩りを行い、その肉は食用に、骨は道具や装身具に、脂は灯明などに用いた。彼らが猟犬を放って行った猪狩りの手法は、後に彼らの一部が西方へ移動したことに伴い、新天地のヨーロッパにも移植された⁵⁶。ユーラシア大陸のステップ地帯で進化を遂げた馬は、騎馬文化の担い手として名を馳せたアラン族にとって格別な存在であった。アランの男たちは、幼少の頃から、馬の背で暮らすことを常とし、乗馬によらずして地面を歩き回る人々を蔑み、かつ忌み嫌った。

下に紹介する人物像は、かかるアラン族の自画像を今に伝えるものとして注目される⁵⁷。そ



の大腿部が極端に湾曲した形に描かれているこの自画像は、上に述べた乗馬の風習を証左する貴重なものである。この体格上の特徴は、常々人馬一体の生活を営む人々に見られるもので、今日ではアルゼンチンの gaucho（馬に乗って牛や羊の放牧に携わる牧童）たちの体格に同様の特徴が見られる。アラン族の集団内では、ユーラシア大陸の主たる遊牧民の例にもれず、一夫多妻が行われ、集団の統率者を選ぶにあたっては世襲制によらず、合議の上、仲間の中から統率力の資質に恵まれた人物が選出された。彼らは奴隷制を認めず、彼らに臣従を誓った民は、養子縁組の儀式を経て迎え入れられ、分け隔てのない扱いを受けた。宗教は独特の祖先崇拜により、

戦場で勇敢に戦って潔い死を遂げた同胞の靈魂を奉り、それを崇拜した。彼らは、屠殺した動物を祖先の靈に奉げて祖先崇拜を行ったとされるが、その儀式の有様は極めて原始的なものであったと伝えられる⁵⁸。



その一方で、アラン族には軍神を奉る風習もあった。宿営地の中央には、彼らが軍神の化身と見なした刀剣を地面に突き立てて畏敬の対象とした。左の写真史料は、北オセチア・アラニア共和国⁵⁹で発掘された11世紀の遺物を紹介したものである⁶⁰。紹介者の石黒寛によれば、被写体の人物像は、その前頭部にかつてアラン族に愛好された馬首の額飾りを纏っているという。この馬首の額飾りは、スキタイ・サルマタイ文化を継承したアラン族ならではの精神文化を表象する装身具の事例として注目される。またこ

の人物像の片側に見えているすんなりとした容姿の刀剣は、彼の世に知られたアラン刀である。このサーベルタイプのアラン刀に関しては、ローマ帝国の軍団内に東方出自の騎馬部族の影響を受けて騎兵部隊が創設された際、軽騎兵装備の一つとして採用された経緯がある⁶¹。ところで、古代のコーカサス平原のイラン系遊牧民と地中海世界との結びつきは、つとにギリシャ人が地中海西方地域及び黒海北辺地域に進出して殖民都市を建設したことに端を発する。かかる殖民活動の結果、黒海北辺に位置するクリミア半島周辺には、数々のギリシャ人入植地が誕生

し、その後両地域は、とりわけアゾフ海の豊かな海産物を扱う交易などを媒体として、文化的にも緊密な関係を醸成することになる。紀元前期の7世紀から3世紀にかけて、コーカサス一帯を勢力版図としたスキタイ族がギリシャ世界と接触することになるのは、この時代のことである。この両者の関係は、ギリシャ神話が断片的に中央アジアの諸民族に伝播する契機ともなった。

2) アラン族と西方世界

西暦370年代の前期に、コーカサスのアラン族は、自らの行く末を左右する重大な事件に巻き込まれる。それは、東方出自のフン族が大挙してコーカサス平原に侵入してきたことに端を発する。アラン族とフン族は、遊牧版図の利権をめぐる鋭く対立し、両者の間では幾度となく熾烈な争いが繰り返される。やがて両者の抗争はフン族の勝利に終わり、敗者となったアラン族はコーカサスからの退避を余儀なくされる。彼らの一部は西方へ、他の一部はカフカズ山系の山懐に安住の地を求め、自らの延命を模索する。

西方への移動を余儀なくされたアランの集団は、後にローマ帝国の北方に暮らすゲルマン諸族と複雑な関係を保ちながら、南方のローマ世界と渡り合うことになる。西暦4世紀といえば、ローマ世界では、コンスタンチヌス帝（在位288—337年）がキリスト教を公的に受け入れ、小アジアのニケアで招集された宗教者会議（西暦325年）においては、コルドバ出身の宗教指導者オシオが三位一体説を主張してアレキサンドリアのアリオの神学を論破するといった、宗教をめぐる重要な事柄が成就し、決着をみた時代でもあった。また政治の世界では、テオドシウス帝（在位379—395年）の治世以後、ローマ世界は二極化の局面を迎えることになる。それは、この皇帝が退位するに及んで、二人の息子に帝位を継承させたことによる。その結果、西のローマ世界ではオノリウス（在位395—423年）が、東のローマ世界ではアルカディウス（在位395—408年）がそれぞれ皇帝の座に就く。西暦370年代の初期にフン族の圧迫に抗しきれずに西進を余儀なくされたアラン族が遭遇したローマ世界というものは、おおむねかかる様相を呈していた。

4世紀末期ならびに5世紀初頭の諸事を伝えるローマ史には、ローマ帝国の行く末を左右した重大な事件や局面において、アラン族が深く関与した事柄が記されている。西暦378年、皇帝バレンテ（在位364—378年）が率いたローマ軍は、対立関係にあった北方民族の制圧に乗り出す。その戦役においてローマ軍は、騎馬戦に長けた西ゴート族とアラン族の混成軍団に打ち負かされてしまう⁶²。この事件は、コーカサスを後にしたアラン族の集団が、数年後には、すでにゲルマン系の西ゴート族と友好関係を構築するに至っていたことを知らしめるものである。この西ゴート族とアラン族の混成集団は、その後も数十年に渡り行動を共にし、両者の緊密な関係は、前者の頭領アタウルフォが、この混成集団を率いて南仏に到達する414年頃まで続く。南仏に到達した後のアラン族は、西ゴート族と袂を分かち、ローマ側の勢力版図に留まることを選択する。バクラクの研究によれば、南仏のソルボンヌやツールーズの近郊には、中世の初期に至るまで、彼の地に定住を果たしたアラン族の名を冠したアランシアヌス、アレニヤ、アロス、アライネ、アラン、アランスといった地名が存在したといわれる⁶³。

一方、イタリア北部のミラノ、ペロナ、パドバからアルプスに通じる峠道の周辺にも、前述の南仏の事例と同様に、中世の初期に至るまで、アラン族の足跡を伝えるアライン、アレニヤ、

アラニヤ、アレニョ、アラノ・ディ・ピアヴォといった地名が存在したことが知られている⁶⁴。これらの地名の由来については、5世紀の初期にオノリウス帝治世下の西ローマ帝国に仕えて武勇を馳せたアラン騎馬先鋒隊との関係が指摘されている⁶⁵。西暦410年、ローマ帝国揺籃の地ローマは、アラリッコ率いる西ゴート族の攻撃を受けて壊滅的な打撃を被り、興廃する。アラリッコの軍勢は、それに先駆けること401年と405年にも西ローマ帝国に侵入して略奪行為を働く。この不測の事態に臨み、西ローマ帝国軍の総大将スティリコ（バンドル族出身）は、配下のアラン族に先鋒隊を担わせ、侵略者に対して追討作戦を展開する。前線において追討軍を指揮したのは、サウルと名乗るアランの武人であった。サウル指揮下のアラン騎馬先鋒部隊は、命を投げ打って善戦し、西ローマ帝国を国難から救う。指揮官サウルは、405年のペロナ近郊での戦闘で戦死したと伝えられる⁶⁶。

さて西方へ移動したアラン族の中には、終始一貫してローマ帝国に服属することを拒否し続けた集団もあった。パンノニア平原においてバンドル族と同盟関係を結んだアランの集団がそれである。両者は、その後混成集団を形成して西進し、ローマ帝国の辺境地帯に姿を現す。スティリコは、軍隊を派遣してこの集団の動向に睨みを利かせ、一度は彼らをライン川の向こう岸へ追いやる。406年、彼らは新たに南進を開始し、厳冬期に氷結したライン川を越えて帝国内に再度侵入する。同年、彼らはフランク族の襲撃を受けて壊滅の危機にさらされるが、危機一髪のところまで支援に駆けつけたレスペンディアルとそのアラン騎馬部隊に救出される。南仏のローマ軍団の指揮官らは、新参のバンドル・アランの混成集団に対してローマへの服属を促す。この計らいに対して、ローマへの服属の意思を表明したのはゴアル一派のアラン人たちだけに留まった。

翌年の407年には、コンスタンチン三世がブリテン島で召集した軍隊を率いて南仏に到着する。コンスタンチン三世は直ちに騎馬戦術に長けたアラン人らを抜擢して親衛隊を組織し、その一方で、彼に賛同するアラン人らを招集して新たな部隊を創設する。新参部隊の兵員となったアランの武人らは、別名オノリアンとも呼ばれた。このオノリアン部隊には、南仏一帯におけるローマの権益を擁護し防衛する観点から、ピレネー山麓一帯に所有地が与えられ、周辺の要衝地の防備が任された⁶⁷。409年には、ローマへの服属を拒否したバンドル・アランの混成集団が、大挙してピレネー越えを敢行し、スペインになだれ込むという事件が発生する。その際、この大集団がピレネー山麓の主たる峠道をさしたる支障もなく通過できたのは、かつての同盟者及び同胞を思いやるオノリアンたちの配慮があったからだといわれている。ところで、ピレネー山麓のアラン谷（Breche d'Allanz）周辺には、現在もオノリアン兵団の後裔にあたるアラン人たちが暮らしている。

イベリア半島に到達したバンドル・アランの混成集団の内、シリング部のバンドル人はバエティカに、ハスディング部のバンドル人はスエヴィ族と共にガリシアにそれぞれかりそめの定住地を確保する。かたやアラン族は二手に分かれ、一方はルシタニア（現在のポルトガル北部一帯）に、他方は地中海に面したカルタヘーナ周辺に一時の拠点を構える。その間、バンドル族とアラン族はオノリウス帝に使者を送り、両者ともローマに服属する意思があること、またそのためには、彼らの側から人質を差し出すこともやぶさかではないことを伝える。しかしながらこの申し出は受理されず、逆にローマ側の将軍コンスタンティウスは、南仏の西ゴート勢力を先鋒隊に起用して、イベリア半島のバンドル・アラン集団の制圧に乗り出す。掃討作戦は

3年の月日に及び、シリング・バンダル族を率いたフレドバルとルシタニアのアラン族を率いたアブドクがローマ側に捕らえられる。その後、フレドバルは放免され、アブドクは処刑された。この事件後は、ローマ側に内通して難局を乗り切ったハスディング部の頭領グンタリックが、彼の地のバンダル人とアラン人らを統率することになる。しかしながらこの事態に及んでも、バンダル・アラン集団と北方の西ゴート族との敵対関係は解消されなかった。やがて南仏でフランコ族との抗争に敗れた西ゴート族が大挙してイベリア半島になだれ込んで来ると、新参者とバンダル・アラン集団との対立の構図はさらに悪化の一途をたどる。軍事的に圧倒的優勢を誇る西ゴート族を前にして、なす術を失ったバンダル・アランの混成集団は、彼らがピレネー越えを敢行してから20年後の439年に再び民族移動を開始する。このたびの民族移動では、ハスディング部出身のガイゼリックが集団を統率する。8万人を数えたと言われるこの集団が向かった先は、北アフリカ沿岸部の中央部にあって、地中海を挟んでローマのほぼ対岸に位置する一帯であった。かつてこの場所には、つとに商業国家として栄え、一時はローマ帝国とも覇権を争うほどに力を鼓舞した、彼のカルタゴ帝国が都を置いていた。やがて彼らは、この新天地にバンダル・アランの名を冠した王国を建設し、初代の王には時の統率者ガイゼリックを迎える。その後この王朝は、約1世紀に渡り彼の地に存続することとなる。それを可能ならしめた一つの要因は、東ローマ帝国に仕えたアラン人たちにあった。

4世紀の終焉期にテオドシウス帝は、西方における政争に介入する目的で、コンスタンチノープルから軍隊を率いてローマに向かう。留守を任されたルフィヌスは、当時北方の国境にいたフン族やアラン族を帝国軍隊に迎え入れ、帝都周辺の治安維持にあたらせる。やがてフン族は傭兵の職務を離脱してゆくことになるが、一方のアラン族は職務を全うして帝国内に踏みとどまる。421年のアルザネネの戦闘において、ペルシャ軍と戦って勝利の立役者となった東ローマ帝国の将軍アルダブリウスはアラン人であった。439年に北アフリカにバンダル・アラン王国が誕生すると、テオドシウス二世（在位408—4050年）は、時の将軍アスパルにバンダル・アラン王国の攻略を命じる。勅命を受けたアスパルは、艦隊を率いてバンダル・アラン王国に攻め入るが、結果は東ローマ軍の敗北に終わる。戦後処理の一環として両者の間では条約が交わされ、新生バンダル・アラン王国の延命措置が模索された。テオドシウス二世も承認したこの条約を成立させたアスパル将軍は、前出のアルダブリウスの息子であった。5世紀前半期には、約50年に渡ってアルダブリウス家のアラン人士らが、東ローマ帝国の政界ならびに軍事部門において活躍する。ところがアスパルの息子のパトゥリキウスに血筋として皇帝の座に就く資格が与えられるようになると、それを心よしとしないローマ貴族は、アスパル家の取り潰しを画策し、ついには一族もろとも殺害して葬り去る。この事件は、その後の東ローマ帝国と北アフリカのバンダル・アラン王国との外交関係にも影響を及ぼすことになる。410年に西ゴート勢力の略奪行為にさらされてローマが壊滅状態に陥って以降、西ローマ社会は斜陽の一途をたどる。かかる事態を憂慮した東方のローマ社会では、昔日のローマ帝国の再興を望む機運が一段と高まる。東ローマ帝国は、その機に乗じて軍事力を行使し、地中海世界の再編成に乗り出す。かかる覇権主義の御旗の下では、北アフリカのバンダル・アラン王国も例外的には扱われなかった。533年、バンダル・アラン王国は、フスティニアヌス帝が派遣した軍隊によって潰されてしまう。ここに至り、370年代以降、西方世界を1世紀以上に渡って彷徨したアラン人の民族移動の歴史にも終止符が打たれる。

3) アラン族と東方世界

アラン族が東方世界と直接に関係を持つようになるのは、13世紀の30年代後半期になってからのことである。モンゴル・ウルスの二代皇帝オゴデイ（在位1229—1241年）は、父チンギスの遺志を継ぎ、版図拡大の一環としてカフカズ山系北麓一帯に暮らす諸民族の制圧に乗り出す。時同じくして、キプチャク族などを従えたバトゥ（チンギスの長子ジュチの息子）が東ヨーロッパに侵攻したのは、モンゴル・ウルスのかかる版図拡大路線に呼応して敢行されたものであった。カフカズ山系北麓一帯で展開された侵攻作戦には、グユク（後の3代皇帝定宗）、モンケ（後の4代皇帝憲宗）、ポリ、カダーンらの軍勢が投入された。この軍事行動の最中にアラン族と一戦を交えたのが、モンケ配下の軍勢であった。アラン族は、モンケの率いる侵攻軍と3カ月に及ぶ死闘を展開するが、仕舞いには軍勢に勝るモンケに軍配が上がる。熾烈を極めた戦闘の最中にアランの武人たちが見せた猛々しい振る舞いは、指揮官モンケに強烈な印象を与えたようである。モンケはカフカズを去るにあたり、アラン王ハン・フー・スー（杭忽思）に対して、家臣団の中から一千人の武人を選びだして自ら率いる軍団に供出するように命じる。モンケの要求は履行された。モンゴル軍団配下の初期のアラン騎馬千人隊はかかる経緯を経て創設されたものであった。当初この部隊の指揮はアー・ター・チー（阿荅赤、杭忽思の長子）が担った。モンケのモンゴル本土への帰還に際し、阿荅赤指揮下のアラン部隊も前者の軍勢に従って東方へ移動する。アラン王杭忽思の一連の対応を評価して、後にモンゴル王室は、この王に金符を下賜して応えている⁶⁸。

13世紀の初頭にモンゴル軍と一戦を交えたカフカズ山麓北辺部のアラン人たちは、ギリシャ正教会の精神文化の懐にあった。その頃の彼らが、ギリシャ人の聖職者を迎え入れ、ギリシャ文字を用いて自らの言語を記していた事実は、そのことを物語る⁶⁹。その一方で、当時のアラン人は、スキタイ文化ならびにサルマタイ文化の流れを汲む騎馬文化特有のもの作りの技を連続として継承していた。中でも彼らの金属加工技術は、他に類を見ない高度なものであった。彼らに継承された騎馬文化ゆかりの冶金術は、この民族の並外れた尚武の気質ともあいまって、とりわけ軍装品の生産にその威力を発揮した。アラン人が得意としたこの金属加工技術は、帝国として発展の途上にあったモンゴル・ウルスにとっても必要不可欠なものであった。前述のアラン千人隊は、モンゴル本土に到着した後にモンゴル軍団の左翼陣営（モンゴルの伝統では、北を背にして右手を右翼、左手を左翼とする）に組み込まれ、中華本土の山東省一帯に送り込まれる。それは、当時この一帯が鉄鉱石の産出地であったことも深く関係していた。鎖帷子の製作技術は、前述のアラン刀と共にアラン人の優れたものづくりの技を象徴するものの一つであるが、軽騎兵装備に適したアランの鎖帷子がローマ世界に登場するのは、ローマ軍団にアラン式の騎兵部隊が創設されることになる4世紀後半期以降のことである⁷⁰。一方、この系譜の鎖帷子が東方へ伝播することになるのは、後漢期の漢軍の軍事行動に絡むものであった⁷¹。後漢期には、同王朝が軍隊を派遣して汗血馬の名で知られたフェルガーナの名馬の獲得に乗り出す。この軍事行動は、驃馬の獲得のみならず、馬の飼育に不可欠とされた苜蓿（クローバー＝うまごやし）が人為的に東アジアの中華本土に移植される契機ともなった⁷²。ひるがえって、13世紀の中葉にアヴィニョンの教皇庁の使者としてモンゴル本土に旅したルブルクの見聞録にも、アラン人らのものづくりの技が高度なものであったことに言及したエピソードが記されている。それによれば、ルブルクはモンゴル本土からの帰還に際し、カスピ海の西岸部を南進

してヨーロッパに戻るが、彼はそのあたりで鎖帷子を纏ったモンゴル兵の一団と遭遇する。彼らの軍装備に興味を示したルブルクに対して、兵士の一人が、アラン人がもの作りの技に長けた人々であること、また彼らが着用している鎖帷子はアラン人の武具職人が製作したものであるといったことなどを告げる⁷³。

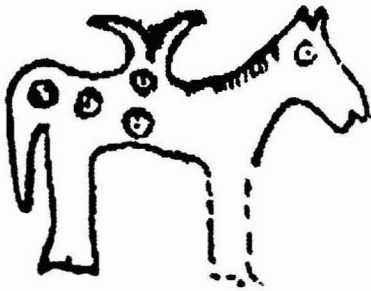
さて漢土に送り込まれたアランの武人集団は、クビライ（世祖、在位1260-1294年）の登場によって一躍活躍の場を得る。クビライは華北一円を支配下におさめると、その勢いに乗じて物資の豊かな江南地方の併合に乗り出す。南宋計略と呼ばれたこの侵攻作戦には、種々の西域出自の騎馬民族が投入され、それぞれが先鋒隊を担って活躍する。元朝下で阿速と呼ばれたアランの騎馬部隊もその一翼を担った。アランの武将らは、持ち前の高武気質を発揮して奮戦し数々の軍功に輝く。クビライはアラン部隊の活躍を高く評価し、1272年には、皇帝自らの命により、左右両翼からなるアラン近衛部隊が創設される⁷⁴。南宋計略が終了した後は、アラン王家出自の武将らがハン・バーリク（現北京）に召集されて帝都周辺の警護の一端を担い、エリア家（也烈拔都兒）とその配下の軍勢は、治安維持を目的として揚州や杭州の周辺域にとどめ置かれる。これらのアラン部隊を率いた主たるアラン人士の面々が、前出の『元史氏族表二』にそれぞれの家系図に基づいて紹介されている⁷⁵。

さて、教皇ニコラス四世（在位1288-1292年）が特使として元朝に派遣したモンテ・コルビノが来朝すると、アラン人はキリスト教徒としての好から、この聖職者を精神的薫陶者として迎え入れる。モンテ・コルビノは、来朝以後34年に渡り、漢土におけるキリスト教の布教に身を捧げて生涯を閉じる。この聖職者が1328年にハン・バーリクで永眠すると、帝都周辺では彼の後任人事をアヴィニョンの教皇庁に求める動きがアラン人士の間で活発に展開される。モンゴル王朝十四代皇帝トゴン・テムル（順帝、在位1333-1370年）は、彼らの要望を汲み入れ、1336年、フランシスコ修道会の僧侶アンドレアを団長とする総勢15名からなる使節団をアヴィニョンに派遣する。モンテ・コルビノの後任人事に絡む要請活動の中心的役割を担った人物らは、福定（アラン王家五代頭首、元朝軍統合参謀長の一人）、香山（フー・テイ・ライ・ツ一家四代頭首、衛都指揮使ならびにアラン左翼近衛部隊長の一人）、者燕不花（ニエ・クラ家四代頭首、武官の人事や軍隊の訓練ならびに兵馬・軍装備・兵器の調達に関わる諸事を司る兵部尚書及び財務を扱う大司農丞などの役職を兼務）といったアラン人士らの面々であった⁷⁶。彼らの存在は、元朝政府の軍事部門においてアラン人が影響力を行使し得る要職に就いていたことを傍証するものであり、極めて注目される。そもそも騎馬民族は、総じて新たな環境に素早く順応する能力に長けていたことで知られる。前出の東ローマ帝国におけるアルダブリウス家ならびに元室に仕えて栄達の道を歩んだアラン人士らの事蹟は、騎馬民族のかかる高い適応力を裏付ける典型的事例として注目される。

ひるがえって、南宋計略が一段落すると、元朝政府は、南宋攻略に功績のあった西域及び中央アジア出自の騎馬部族を長江一帯のデルタ地帯に配置し、彼の方面における元朝の権益の保護及びその治安の維持にあたらせた。和田清の研究によれば、長江デルタ地帯に配置されたこの防人軍団は、総勢14万人に上る規模のものであったとされる⁷⁷。この軍団の一翼を担ったアラン騎馬兵団を率いたのは、エリア・パー・トゥ・エル（也烈拔都兒）を初代の家長とする血筋の人々であった⁷⁸。守備隊としての彼らの任務は、長江南方の杭州及びその周辺地域の治安維持を担当するものであった。元朝治下の杭州は、元室の財政に豊かな潤いをもたらす最重要

都市の一つであった。かかる要衝地の防備には、元朝政府としても格別の配慮をもって臨まねばならなかったはずである。アラン騎馬兵団が杭州及びその近隣地帯に守備隊として配置されていた事実は、彼らが元室と強い絆と信頼関係で結ばれていたことを裏付けるものとして注目される。実際に元朝に仕えたアラン軍団は、崩壊寸前の元室にも見切りをつけることなく最後まで忠誠を貫き通したことで知られる。それ故に、攘夷思想が吹き荒れた元朝末期の混乱期には、反元勢力の恨みを買ったアラン人らが、華北でも江南の地でも殺害の標的とされた⁷⁹。元朝が瓦解したことに伴い、13世紀の後半期以降およそ80年に渡り、元朝軍の守備隊として長江のデルタ地帯及びその南方に連なる江南地方に駐屯した西域出自の騎馬部族も、やがては四散消滅の運命を辿ることになる。それはともかくとして、度重なる歴史の荒波に翻弄されながらも、アラン族がユーラシア大陸の西端と東端にまで雄飛して繰り広げた一大歴史絵巻は、世界史上に特筆されてしかるべき価値を孕んでいると見なされる。

さて、かかる民族移動の歴史に彩られたアラン族の通過点となったユーラシア大陸の各地で



は、有翼獣と称される異色の装飾紋様が発見されている。この装飾意匠はアラン文化に由来するとされ、その特徴は草食動物の背に二股に分岐した翼と思しき突起物があることにある。左に示した二様の有翼獣は、二者とも、南仏出自の有翼獣（前項の卍紋を参照）と同じく、アラン族ゆかりの装飾意匠である⁸⁰。両者は出所先を異にし、前者は南ロシアで、後者はハンガリーで発見されたものである。紹介した二様の有翼獣意匠にはそれぞれに個性が感じられるが、律動性の観点から見れば、

西方出自のものが動的描写に優れていることは歴然としている。それには、異郷の地で生き抜くことを強いられた西方アラン人の生き様が反映されていると考えられなくもない。それはともかくとして、このアラン族に特有のものであるとされる有翼獣意匠

には、明らかに冒頭に紹介した中世今帰仁の有翼飛走馬を連想させる特徴や趣が看取される。アラン族といえば、筆者は、先に今帰仁城跡出土の青花皿にあしらわれた十字紋の氏素性について論考した論文において、この十字紋が元朝に仕えて江南地方に駐屯したアラン騎馬兵団にゆかりの十字架紋であることを論証した経緯がある⁸¹。問題の有翼飛走馬をあしらった白磁碗が上述の青花皿と焼成年代を同じくするものであることを鑑みれば、この有翼飛走馬の存在は、中世今帰仁勢力と元朝配下のアラン騎馬兵団の奇しき関係を立証する有力な物証になりうると判断され、同時にそれは、歴史の荒波に翻弄されながらも、尚武の民として中世の東アジアにその存在を知らしめたアラン族の足跡を偲ばせる比類なき装飾意匠でもあると判断される。

さてこれまでの考察の結果、①食文化と関わる史料からは麦文化圏との関わり、②宗教及び呪術と関わる史料からは、ギリシャ正教や騎馬遊牧民との関わり、③軍装備関連の史料からは、モンゴル騎馬軍団との関係、④娯楽関連の史料からは、イラン文化との繋がり、⑤有翼飛走馬の装飾意匠については、アラン族の有翼獣意匠との繋がり、といったものが明らかになった。一体中世の東アジアにおいて、これらの文化的要素に彩られた民族集団といえば、元朝に仕え

て江南地方に武勇を馳せた西域出自の色目系騎馬兵団以外には考えられない。中でもこの防人軍団の中核的存在であったキリスト教徒にして尚武の鏡と謳われたアラン騎馬兵団の事蹟は、考察した諸史料と不可分に関係する内容を孕んでいる。ところで『元史氏族表二』⁸²に登場する也速歹兒、玉哇失、拜住といったアランの武人らは、彼の虎退治の武勇談で知られた也烈拔都兒の息子と孫にあたる人々である。孫の拜住の代に至り、杭州近隣に配置された拜住配下のアラン部隊が、張士誠や方国珍らの率いる反元勢力と対峙して敗れ去る。中国の王朝史を記した元史や明史には、敗残の徒となったアラン部隊のその後の消息や顛末を伝える記述は見当たらない。但し、元末・明初の混乱期の社会状況に言及した民間史料には、当時の江南人と外国人系の人々との劣悪な関係に言及した次のような文言が見られる。

丁鶴年回回人至正末方氏據浙丁鶴年東深忌色目人

鶴年畏禍遷避無常居有句云行蹤不異梟東徒⁸³

上に引いた記述内容は、外国人を忌み嫌う方国珍勢力の台頭に戦ったイスラム教徒の丁鶴年なる人物が、寄る辺を失って彷徨を繰り返し、ついには浙江東端から東方の彼方へ逃げ延びていったことを伝えるものである。この逃走劇のあらまは、14世紀前半期の浙江東端地域の住民の間に東方の海原に浮かぶ南西諸島に関する情報がある程度共有されていたことを知らしめるものであり、大変に興味深い。彼の地から海原を隔てた東方域に位置する今帰仁には、古より次のような伝承が語り継がれている。

むかしシイナ城には絶世の美女がいたそうであるが、西がわ山の山頂に若い武士があらわれ、夜ともなればいつも恋の歌をうたっていたようで、彼の女はこれに対して返し歌をうたい、いつしか二人は相愛の仲となって、逢う瀬を楽しんでいたという。ところが、伊豆味のアブ岳に住み、馬に乗って出没する得体の知れない武士があらわれてからは、その美女と西側の若い武士の姿は見えなくなったそう⁸⁴。

伝承に登場する「馬に乗って出没する得体の知れない武士」といったものの存在には、元朝末期に寄る辺を失って方々に散って行った色目系騎馬軍団を出自とする落人集団との関わりを想起させる趣が漂う。かたや『中山世譜』が伝える攀安知像にも、日本古来の武士像とは一線を画す、渡来系武人の風貌を連想させるものがあって面白い。この史書には、攀安知が武芸絶倫の人であったと記されている。またこの人物の最後の振る舞いに言及した段においては、彼が千代金丸を振りかざして靈石に十字を切刻したことや、自刎して果てたことなどが記されている⁸⁵。因みに自刎とは、鋭利な刃物で自らの頸動脈を切断して命を絶つことをいい、切腹とは一線を画す自殺行為を指す。さて史書は、攀安知が絶命した様子を上述の内容を持って伝えるのであるが、一方で、彼が何故にこの類まれなる名刀を所有していたのかについては、黙して語らない。周知の通り、元来沖縄には、鉄や金を豊かに産出する鉾山などというものは存在しない。かかる土地柄に千代金丸ほどの名刀が存在した事実は、中世今帰仁勢力の氏素性を問う観点からすれば、いやがうえにも注視されてしかるべき内容を孕んでいると認識される。それはともかくとして、これまでの考察の結果、中世今帰仁勢力ゆかりの出土史料及びその文物は、元朝末期の江南地方で歴史の闇に葬り去られたアラン騎馬兵団との繋がりを証左・傍証する色合いに満ちていることが判明した。かかる考察結果を基に演繹するならば、中世今帰仁勢力を束ねた領袖攀安知は、元朝末期の混乱期に江南地方で消息を絶った拜住指揮下のアラン兵団を

出自とする落人集団の後裔にあたる人物であったと判断される。またかかる脈絡に沿って千代金丸の氏素性に言及すれば、それは、攀安知とその配下の中核軍団が、常々軍神として崇め奉っていたアラン刀であったと解釈される。ここに至り、かつて伊波が唱えた中世今帰仁勢力の朝鮮半島起源説は退けられることになる。かたやその一方の中華大陸起源説であるが、それについては、仮に伊波が中華系人との関わりを想定していたのだとすれば、それも否としなければならない。それはそれとして、出土史料にも事欠く時代に、言語学上の手掛かりだけを解明の糸口にして今帰仁という地名の義を解きほぐした伊波の功績は、あらためて顕彰されなければならないと認識される。

おわりに

このたびの考察では、中世今帰仁勢力ゆかりの装身具類に言及することは差し控えた。それは関係する史料が十分に整わなかったことによるものである。それはともかくとして、今帰仁城跡から出土している円環状イヤリング及び二股状かんざしの類は、西域出自としての雰囲気濃厚に醸し出す。円環状イヤリングを例にあげれば、それは歴史上、つとにササーン朝ペルシャの女性たちの間に流行りだしたのを契機として、その後はペルシャ女性の美意識を象徴するものとしてユーラシア各地に流布したものであるといわれている。

また千代金丸の制作年代をめぐることは、さらなる検討が必要であると考えている。その解明に向けては、さしあたり千代金丸の鞘にあしらわれた特異な紋様の正体を明らかにすることが先決であると認識される。この紋様は、さほど注目を浴びることなく今日に至っているが、それにも元王朝との繋がりを解きほぐす鍵が隠されていると推察される。

最後に、本稿で考証した中世今帰仁勢力とギリシャ正教との関わりは、我が国におけるキリスト教伝来史にも再考を促す要素を孕んでいると認識される。よって、今後その分野の研究においても新たな展開と進展が期待される。

【注釈】

- ¹ 伊波普猷、『伊波普猷全集』第七巻、平凡社、1993年、481頁。
- ² 上間篤、「青花碗に描かれた騎馬戦士の氏素性を探る」、『名城大学紀要』第10・11号、2005年。
- ³ 増田精一、「石臼の出現と漢代の東西文化交流」、『Museum』93号、1958年、27頁。
- ⁴ 森安孝夫、『シルクロードと唐帝国』、講談社、2007年、189頁。
- ⁵ 三輪茂雄、「石臼の謎を追って」、『自然 Nature』32号(6)巻、1977年、86～88頁。
- ⁶ 『今帰仁城跡発掘調査報告II』、今帰仁村教育委員会編、1983年、PL.71。
- ⁷ 増田、前掲論文、27頁。
- ⁸ 今帰仁城跡の郭内から出土。今帰仁村歴史文化センター蔵（筆者撮影）
- ⁹ 三輪、前掲論文、87頁。
- ¹⁰ 蔡温、『中山世譜』、42頁。
- ¹¹ 今帰仁村歴史文化センター蔵（筆者撮影）

- ¹² 今帰仁村歴史文化センター蔵（筆者撮影）
- ¹³ 上間篤、「青花皿にあしらわれた十字紋の氏素性を探る」、『名桜大学紀要』12号、2006年、2頁。
- ¹⁴ 『新シルクロード』、NHK新シルクロードプロジェクト編著、日本放送出版協会、2005年、112頁。
- ¹⁵ 『尚家継承美術工芸—琉球王家の美—』、那覇市市民文化部歴史資料室編、2002年、20頁。
- ¹⁶ 『国史大辞典』第13巻、吉川弘文館、1992年、228頁。
- ¹⁷ Я.В.Баасансүх, *Хас хаанаас ҮҮссэн бэ? Улаанбаатар:Интерпресс хэвлэлний Уомпанид хэвлэв*, 2000, pp. 6-7.
- ¹⁸ 鈴木秀夫、『気候変化と人間—1万年の歴史—』、大明堂、2000年、323～333頁。
- ¹⁹ 鈴木秀夫、前掲書、338～339頁。
- ²⁰ 出展：Bernard S. Bachrach, *A History of the Alans in the West*, U of Minnesota Press, 1973.
- ²¹ Я.В. БААСАНСҮХ, op. cit., p. 20.
- ²² Alberto Álvarez Peña, *Simbología mágico-tradicional*, Gijón: Picu Urriellu, 2002, p. 18.
- ²³ Álvarez, op. cit., p. 41.
- ²⁴ 白石典之、『チンギス・カン “蒼き狼”の実像』、中公新書、2006年、190～191頁。
- ²⁵ 『今帰仁城跡発掘調査報告I』、今帰仁村教育委員会編、1983年、(第46図)。
- ²⁶ 近藤好和、『弓矢と刀剣』、吉川弘文館、1998年、51頁。
- ²⁷ Сартборжигин Жамбын БАЗАРСУРЭН, Олхонуд Хайнзангийн ШАГДАР, *ИХ СУУ ЗАЛИЙН ИВГДАР*, Улаанбаатар:СОЁМБО, 2003, p. 175.
- ²⁸ ドーソン、『モンゴル帝国史1』佐口透訳注、平凡社、1994年、13頁。
- ²⁹ 『今帰仁城跡発掘調査報告II』、今帰仁村教育委員会編、1991年、319頁。
- ³⁰ 増田精一、『佩砥』『Museum』、34号、1954年、26頁。
- ³¹ ドーソン、『モンゴル帝国史2』、佐口透訳注、平凡社、1994年、34頁。
- ³² 『今帰仁城跡発掘調査報告II』、今帰仁村教育委員会編、1991年、309頁。
- ³³ 増田精一、『スキタイ系文化の銜留金具』『Museum』、159号、1964年、2頁。
- ³⁴ 『尚家継承美術工芸—琉球王家の美—』、那覇市市民文化部歴史資料室編、2002年、20頁。
- ³⁵ 北川誠一・杉山正明、『大モンゴルの時代』、中央公論社、1997年、204頁。
- ³⁶ Álvarez, op. cit., p. 43.
- ³⁷ Álvarez, op. cit., p. 138.
- ³⁸ R. Ghirshman, *IRAN*, Penguin, 1965, p. 36.
- ³⁹ ナルドの東西世界への伝播については、筆者の論考「ナルドの東漸と西漸を考える」に詳しい。『イスパニア図書』、行路社、2007年、143～150頁。
- ⁴⁰ 前嶋信次、『世界の歴史8 イスラム世界』、河出書房新社、2001年、48頁。
- ⁴¹ 前嶋、前掲書、48頁。
- ⁴² 出展：『和樂』十一号、花塚久美子編集、小学館、2003年、113頁。
- ⁴³ 石田幹之助、『長安の春』、東洋文庫、平凡社、1991年、172頁。
- ⁴⁴ 森安孝夫、『シルクロードと唐帝国』、講談社、2007年、88～89頁。
- ⁴⁵ 西村眞次、『日本海外発展史』、東京堂、1942年、90頁。
- ⁴⁶ 宋・元期の江南地方に拠点を構えてインドや中近東地域との海上交易に従事したベルシャ系イスラム商人集団。桑原隲蔵の研究は、この回商集団の事蹟に詳しい。「蒲壽庚の事蹟」『桑原隲蔵全集第五巻』、

岩波書店、1968年参照。

⁴⁷ 北川誠一・杉山正明、『世界の歴史9 大モンゴル時代』、中央公論社、1997年、281頁。

⁴⁸ このペルシャ文書の内容は、小林元によって解説され、その全容が氏の論文の中に収められている。『日本と回教圏の文化交流史』、財団法人中東調査会、1976年、35～37頁。

⁴⁹ 今帰仁村歴史文化センター蔵、筆者撮影

⁵⁰ 『今帰仁城跡発掘調査報告II』、今帰仁村教育委員会、1991年、271頁。

⁵¹ <揮劍劈開石自刎、中略、有十字劈開之劍名千代金丸>、蔡温、『中山世譜』、沖縄県教育委員会編、1986年、42頁。

⁵² 上間篤、「ナルドの東漸と西漸を考える」『イスパニア図書』、行路社、2007年、146～148頁。

⁵³ 上間篤、「青花皿にあしらわれた十字紋の氏素性を探る」『名桜大学紀要』第12号、2006年、1～19頁参照。

⁵⁴ 今帰仁村歴史文化センター収蔵品、筆者撮影

⁵⁵ 『モンゴル秘史3』、村上正二訳注、平凡社、1997年、301頁。

⁵⁶ Bachrach, op. cit., p. 118.

⁵⁷ 出展、Bernard S. Bachrach, *A History of the Alans in the West*, Minneapolis: U of Minnesota Press, 1973.

⁵⁸ Bachrach, op. cit., pp. 31-32.

⁵⁹ カフカズ山脈の山懐にあってロシア連邦に属する共和国の一つ。現在この国にアス・アラン族の後裔の人々が暮らしている。近年の情報によれば、この国の総人口は65万人を数え、総勢100にも上る異民族の集団が狭い国土にひしめき合い、その高い人口密度は、世界でも有数のものであるとされる。

⁶⁰ 石黒寛、『もう一つのシルクロード 草原民族の興亡と遺産』、東海大学出版会、1981年、172頁。

⁶¹ Bachrach, op. cit., p. 36.

⁶² Bachrach, op. cit., p. 27.

⁶³ Bachrach, op. cit., p. 30.

⁶⁴ Bachrach, op. cit., p. 40.

⁶⁵ Bachrach, op. cit., p. 39.

⁶⁶ Bachrach, op. cit., p. 35.

⁶⁷ Bachrach, op. cit., p. 55.

⁶⁸ 黄鐘識、『元史氏族表二』、207頁。

⁶⁹ *The Journey of William of Rubruck to the Eastern Parts of the World, 1253-55, as Narrated by Himself*, Trans. William Woodville Rockhill, London: The Hakluyt Society, 1900. p. 88.

⁷⁰ Bachrach, op. cit., p. 36.

⁷¹ M. Rostovzeff, *Iranians and Greeks in South Russia*, Oxford: The Clarendon Press, 1922, p. 204.

⁷² 『新シルクロード1』、NHK新シルクロードプロジェクト編著、112頁。

⁷³ Rubruck, op. cit., p. 261.

⁷⁴ A. C. Moul, *Christians in China before the Year 1550*, NY: Macmillan, 1930, p. 26.

⁷⁵ 黄鐘識、前掲書、207～210頁。

⁷⁶ Moul, op. cit., pp. 261-264.

⁷⁷ 和田清、『支那官制發達史（上）』、中華民国法制研究会、1942年、366頁。

⁷⁸ 黄鐘識、前掲書、207～210頁。

⁷⁹ 桑原隲蔵、「蒲壽庚の事蹟」『桑原隲蔵全集第五卷』、岩波書店、1968年、239頁。

- ⁸⁰ 出展：Bachrach, op. cit.
⁸¹ 上間、前掲論文、16頁。
⁸² 黄鐘識、前掲書、207～210頁。
⁸³ 瞿 佑、『歸田詩話下』、1466年（成化二年）、18頁。
⁸⁴ 新城徳祐、『沖縄の城跡』、緑の生活社、1982年、125頁。
⁸⁵ 蔡温、前掲書、42頁。

参考文献

- Álvarez Peña, Alberto. *Simbología mágico-tradicional*. Gijón: Picu Urriellu, 2002.
 Баасансух, Я.В. *Хас хаанаас Үүссэн бэ? Улаанбаатар*: Интерпресс хэвлэлийн компани хэвлэв, 2000.
 Bachrach S., Bernard. *A History of the Alans in the West*. Minneapolis: U of Minnesota Press, 1973.
 Сартборжигин Жамбын БАЗАРСҮРЭН, Олхонуд Хайнзангийн ШАГДАР. *ИХ СУУ ЗАЛИЙН ИВГДАР*. Улаанбаатар: СОЁМБО, 2003.
 Ghirshman, R. *IRAN*. Penguin, 1965.
 Moul, A. C. *Christians in China before the Year 1550*. NY: Macmillan, 1930.
 Rostovzeff, M. *Iranians and Greeks in South Russia*. Oxford: The Clarendon Press, 1922.
The Journey of William of Rubruck to the Eastern Parts of the World, 1253-55, as Narrated by Himself. Trans. William Woodville Rockhill, London: The Hakluyt Society, 1900.
 上間 篤「青花碗に描かれた騎馬戦士の氏素性を探る」『名桜大学紀要』第10・11号 2005年
 上間 篤「青花皿にあしらわれた十字紋の氏素性を探る」『名桜大学紀要』第12号 2006年
 上間 篤「ナルドの東漸と西漸を考える」『イスパニア図書』行路社 2007年
 石黒 寛『もう一つのシルクロード 草原民族の興亡と遺産』東海大学出版会 1981年
 石田幹之助『長安の春』東洋文庫 平凡社 1991年
 北川誠一・杉山正明『世界の歴史9 大モンゴル時代』中央公論社 1997年
 桑原隲藏「蒲壽庚の事蹟」『桑原隲藏全集第五卷』岩波書店 1968年
 瞿 佑『歸田詩話下』1466年（成化二年）
 『国史大辞典』第13巻 吉川弘文館 1992年
 小林 元『日本と回教圏の文化交流史』財団法人中東調査会 1976年
 近藤好和『弓矢と刀剣』吉川弘文館 1998年
 蔡 温『中山世譜』沖縄県教育委員会 1986年
 白石典之『チングス・カン "蒼き狼"の実像』中公新書 2006年
 『尚家継承美術工芸—琉球王家の美—』那覇市市民文化歴史資料室編 2002年
 新城徳祐『沖縄の城跡』緑の生活社 1982年
 『新シルクロード』NHK新シルクロードプロジェクト編著 日本放送出版協会 2005年
 鈴木秀夫『気候変化と人間—1万年の歴史—』大明堂 2000年
 ドーソン『モンゴル帝国史1』佐口透訳注 平凡社 1994年
 ドーソン『モンゴル帝国史2』佐口透訳注 平凡社 1994年
 『今帰仁城跡発掘調査報告I』今帰仁村教育委員会編 1983年

- 『今帰仁城跡発掘調査報告II』今帰仁村教育委員会編 1991年
西村真次『日本海外發展史』東京堂 1942年
黄鐘識『元史氏族表二』1801年
前嶋信次『世界の歴史8 イスラム世界』河出書房新社 2001年
増田精一「佩氐」『Museum』34号 1954年
増田精一「石臼の出現と漢代の東西文化交流」『Museum』93号 1958年
増田精一「スキタイ系文化の銜留金具」『Museum』159号 1964年
三輪茂雄「石臼の謎を追って」『自然 Nature』32号(6)巻 1977年
森安孝夫『シルクロードと唐帝国』講談社 2007年
和田清『支那官制發達史(上)』中華民国法制研究会 1942年
『和樂』十一号 花塚久美子編集 小学館 2003年